

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 回転木馬の住人

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笠間, 直穂子, Kasama, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000577

回轉木馬の住人

笠間直穂子

フィリップ・ルノーなら、ジュネーヴ大学を定年退職して、いまはラ・ショー＝ド＝フォンに住んでいます。会いたければ、会いに行くこともできますよ。ローザンヌ大学スイス・ロマンド文学センター所長のダニエル・マジエッティさんがそう言ったのは、私がC・F・ラミュの研究と翻訳のため、一年間の予定でセンターの招聘研究員となつて間もないころだった。

ルノーの『ラミュ、または下からの強度』(一九八六)は、切れ味鋭いテクスト分析でラミュの重要なテーマ群を自在に行き来する名著だ。にもかかわらず、著者はその後のラミュ研究ではあまり表に出ておらず、私にとっては謎の存在であるとともに、可能ならスイス滞在中に会ってみたい唯一の人物だった。だから、ダニエルの言葉に、ぜひ会いたいです、と答えた。スイス滞在中も終わり近い二月半ばに、機会はめぐってきた。ラ・ショーの市立図書館で開催される文学関係のイベントに、ダニエルの妻でやはりローザンヌ大学の文学教員であるアンヌ＝リリーズが登壇する。そこで、私とダニエルは観客として参加し、終了後に三人でフィリップ・ルノーの家を訪ねることになった。

ローザンヌからラ・ショーまでは列車で一時間強。北上してヌシャテル湖沿いに進み、ヌシャテルでローカル線に乗り換え、ジュラ山地をのぼっていく。海拔千メートル、フランス国境に近い町は、スイスには珍しく格子状の街路をもつ十九世紀の計画都市で、比較的暖かいローザンヌと異なり、冬場は雪と氷が溶けない。当日は晴天だったが、除雪し寄せた雪が車道と歩道のあいだに高々と積みあがり、歩道はあちこち凍結していた。踏めば必ず滑る氷だから、慎重に避けながら歩く。

イベントは午後三時ごろに終わり、私たちはルノーさんの家に向かった。ところが、目当ての通りが見つからない。アンヌリリーズがスマートフォンを出し、ダニエルは人に道を尋ねた。マネージュはどこですかと聞いている。マネージュという回転木馬のことだ。なぜルノーさん宅へ行くのにマネージュなのか。無事に建物の前に着くと、本当に「アンシャン・マネージュ」と書いてある。重い扉を押した。

踏みこんだ先は、不思議な空間だった。四階まで吹き抜けで、天井はガラス張り。中央は細長い中庭のようになっている。中庭を囲む二層の回廊があり、一階から二階へ、三階へと斜めに階段が伸びる。戸外にあるべき集合住宅の外壁が裏返されて内側に向いている具合なのだが、回廊の壁や柱の素材に厚みがなく、ペンキで淡い色の装飾や大理石模様などが描かれて、十九世紀の大衆演劇の書き割りのよう。マネージュには、屋内調馬場という意味もあるのだ。その語義を知ったのも、実物を見たのも初めてだった。

階段をのぼった二階の一室にルノー氏はいて、にこにこ私たちを迎え入れた。ここは十九世紀半ばに調馬場から労働者住宅に改築され、その後廃墟同然になっていたが、一九八〇年代、解体計画に反対する市民運動の結果、歴史的建造物の指定を受けるとともに、新たに住宅や事務所が整備され、同時に文化施設としても活用されることになった。ルノー氏はといえば、ジュネーヴ大学を去り、さらに夫人を失ったのち、教え子たちに誘われて、彼らがつくる文芸誌の拠点であるラ・ショーに引越し、旧調馬場の住人になったのだという。

ミルフィーユを買っておいただけで、昨日注文したときは普通の大きさがケースに並んでいたのに、今日取りに行ったら巨大でね、一体どうなってるんだろう！と言いながら出してくれたミルフィーユは、実際、巨大だった。そしてルノー氏は、大病をして見た夢のこと、最近の読書のこと、文学仲間のこと、いろんなことを話した。そうそう、それでぼくは発見したんだ、という口調で、目を輝かせて語る。ラミュは国民作家と見なされているため、身構える人も多いが、彼はラミュも前衛的な現代作家も分け隔てせず、いつ読んでも新鮮なものとして捉える語り方をした。

権威も格式も関係なく、ただ純粹に面白いと思ったものへ向かっていく姿勢は、はじけるような筆致で書かれたかつてのラミュ論と変わらない。マネージュの空間は、彼の晩年の暮らしによく似合っていた。